

朝鮮半島南部新石器・青銅器時代集落の特徴

ユ ピョンロク
俞炳璗 (ウリ文化財研究院)
庄田慎矢 訳

はじめに

朝鮮半島の先史時代の中で集落の様相を調べることができるのは、新石器時代と青銅器時代である。新石器時代は氷河期が終わる紀元前10,000年前後から始まったといえるが、現在の資料からは、朝鮮半島においては紀元前6,000年前後に本格的にヒトの居住が始まったと言える。新石器時代には主に採集や狩猟・漁撈を中心とした経済生活をしていたことは、海岸沿いに集中した貝塚遺跡の存在や、耕作遺跡がないこと、穀類の出土量が少量であることを通じて知られる。もちろん、最近では様々な遺跡で雑穀の痕跡が出土してはいるが、新石器時代に農耕の可能性が提起されるには至っていない状況である。

これに対し青銅器時代は新石器時代に比べ圧倒的な集落の増加、農耕遺跡の確認、多量の農耕関連遺物などを通じて、それ以前とは全く異なる経済生活が行われていたことが見て取れる。また、新石器時代のような住居跡を主とした単純集落から、集落を構成する多様な要素が結合した複合集落へ、社会的性格までもが明確に変化したことが分かる。

二つの時代のこうした社会的経済的な差異がどのような要因によるものかは明確でないが、当時の自然環境の変化に起因した可能性が高い。

1. 新石器時代における集落の様相

1) 時期区分

朝鮮半島の新石器時代の時期区分には、研究者ごとに少しづつ差がある。これは[表1]にあるように、櫛目文土器を中心とした編年に対する観点の差異に起因する。2,000年代以後、個別の住居跡をはじめとした集落の調査事例が増加したこと、既存の土器中心の編年から次第に集落を中心とした[表2]のような時期区分へと移行しているかのようではあるが、いまだ基本的には既存の土器中心の年代観から大きく抜け出してはいない。何よりも文様中心の土器編年に比べ、住居跡中心の編年の細部基準が鼎立されていないため、早期の設定が難しく、時期的な幅も広くないという限界を見せていく。一つ注目される点は、現在盛んに議論されている江原道文岩里遺跡を除いては、新石器時代の農耕関連構造が存在しないのにもかかわらず、この間の分析資料を通じて農耕の発展程度による時期区分がなされた点である(李景娥 2005)。

表1 土器を中心とした朝鮮半島新石器時代の編年

研究者	金元龍 (1986)	河仁秀 (2006)	李相均 (2010)	韓国考古学 講義(2010)
早期	B.C. 5,000 ~4,000	初創期 B.C.12,000~	草創期 B.C.8,000~6,000	-
		6,000~4,500	6,000~4,000	
前期	4,000~3,000	4,500~3,500	4,000~3,000	~B.C.3,500
中期	3,000~2,000	3,500~2,700	3,000~2,000	3,500~2,500
後期	2,000~1,000	3,000~2,500	2,000~2,500	2,500~
晩期	-	2,500~1,200	1,500~1,000	-

表2 集落および農耕を中心とした朝鮮半島新石器時代の編年(B.C.基準)

研究者	林尚澤	裴成赫	具滋振	李昊娥(2005)
時期	(2006)	(2007)	(2010)	
前期	I 4,000~3,600	~4,000	I 6,000~3,500	~5,000
中期	II 3,600~3,000	4,000~2,500	II 3,500~3,000	3,360
後期	III 3,000~2,500	2,500~	III 3,000~	2,520/2,580
晩期	IV 2,500~ 2,000/1,500	-	-	-
備考	中西部地域			農耕発展程度

2) 時期別の集落様相

上記のように、新石器時代の編年は、基準を土器にするか集落にするかによって差が見られることが分かる。本論文ではこれを考慮し、新石器時代を大きく前期・中期・後期に分けて、その具体的な年代は裴成赫(2007)の案を最も合理的と判断し、採用する。

前期 (~ B.C.4,000)

朝鮮半島で最も古い時期の新石器時代住居跡からは隆起文土器が出土し、B.C.6,000年頃に編年される江原道東海岸の襄陽鰲山里遺跡と高城文岩里遺跡がこれに該当する。これら二遺跡はともに海岸沿いの砂丘地帯に立地しており、住居跡の形態は円形である。鰲山里は住居跡17軒と土器焼成遺構および屋外炉9基、文岩里は住居跡5軒と土器焼成遺構および屋外炉6基などが確認された。基本的に居住区域と土器焼成遺構の生産空間が分離される様相を見せるが、こうした集落構造は、新石器時代全般にみられる様相といえる。東海岸地域を除いた南部地方において前期に編年される遺跡としては、30軒余りの住居跡が調査された漢江地域の岩寺洞遺跡や、50軒を超える住居跡が調査された中西海岸の雲西洞遺跡などがある。岩寺洞遺跡は東海岸と類似した河川周辺の沖積地に立地(図4)するが、雲西洞は丘陵に立地(第2図)するという点で差がある。また、住居跡の平面形態も前者が円形(図6)であるのに対し、後者は方形系でありながら内部構造でも段が設置される特異な様相(図3)を見せる。

前期の集落遺跡はまだ多数は確認されていないが、既知の遺跡内に少なからず住居跡が存在しているという点から見て、この時期からある程度の規模を持つ半定着生活がなされていた可能性がある。

中期 (B.C.4,000 ~ B.C.2,500)

前期の集落や貝塚を中心とした遺跡のほとんどが、海岸や海に近い大河川辺に集中しているのに対し、中期からはこうした前期の様相とともに内陸地域にその領域が拡散される様相を見せる。南部地方全体に、地域に関わらず広く新石器遺跡が確認され、新石器時代のなかで最も多くの集落遺跡が分布する。集落の規模では大中小に区分が可能で、集落構造においては前期以来の住居空間と土器生産空間の分離様相が維持される。

東海岸と西海岸に対し、南海岸は集落よりは貝塚遺跡中心という差があり、内陸では金泉松竹里遺跡や智佐里遺跡、眞安ジングヌル遺跡、晋州上村里遺跡のように立地は全て河川辺の沖積地にあたる。住居跡の平面形は海岸が主に円形であるのに対し、内陸は長方形(図7)という点にも差異が見られる。

いっぽう、地域的に限られた大形住居跡である「大川里式住居跡」が内陸地域で一部確認されている。平面長方形の四柱式で、突出した出入口を持ち、内部空間の分割などを特徴とする。

後期 (B.C.2,500 ~)

この時期は先行する前期や中期に比べむしろ集落や遺跡の数が減少する。集落数が急減するだけでなく、住居跡の規模も縮小する様相を見せる。もちろん以前と同様海岸および内陸地域に広く遺跡が分布するが、いくつかの遺跡を除いては集落の範疇に含めるに値する遺跡がほとんどない。江原道東海岸の高城鉄桶里遺跡はこの地域で唯一海岸沿いの丘陵上に7基の方形住居跡が一列に配置された单一時期の集落（図8）である。これに対し内陸の陜川鳳溪里遺跡は平面円形の小型住居跡を中心（図9）としており、中期とは正反対の様相を見せる。

以上に見てきた新石器時代における集落の様相以外に特徴をあげるならば、墓の存在が微々たるものであるという点である。住居内に火葬を行って甕に遺体を入れる事例や、南海岸の一部地域で土壙墓の形態に近い墓から人骨が確認される場合を除いては、この時代に特徴的な墓制が確認されていない。よって集落の構造は住居跡を中心とした住居領域と土器製作や屋外炉跡を中心とした生産地域との単純二分的構造を見せる。

表3 朝鮮半島南部における新石器時代の集落様相の整理

時期	遺跡種類	立地	集落様相
前期 (~B.C. 4,000)	貝塚	海岸砂丘 海岸丘陵	海岸沿いに集落集中
	遺物散布地		住居(土器)生産空間の分離
	集落		住居列状配置
	墓(南海岸)		仁川雲西洞、高城文岩里 襄陽鰲山里、ソウル岩寺洞
中期 (B.C. 4,000~2,500)	貝塚	海岸砂丘 海岸丘陵 河川沖積地 河川辺丘陵	内陸へ集落領域が拡大 大規模集落の盛行 (中西部海岸の丘陵列状集落)
	集落		南海岸において農耕関連資料増加 (アワ・キビ中心)
	墓(南海岸)		ソウル岩沙洞、金泉松竹里、 沃川大川里、昌寧飛鳳里
後期 (B.C.2,500~)	貝塚	海岸丘陵 河川沖積地	遺跡急減 嶺南地方に集落集中
	集落		小規模集落中心(1~3軒)、 一部中規模(列状配置)
			陜川鳳溪里、高城鉄桶里

2. 青銅器時代における集落の様相

1) 時期区分

新石器時代に比べ青銅器時代はその時間幅が狭いためか、時期区分もやや単純である。一部の研究者は早期という時期を設定しているが、特徴とする要素が前期と一部混ざっており、南部地方全体に見られる様相でないことから、前期に含める意見もある。ここでは後者の立場をとる。

よって青銅器時代は大きく前期と後期に分けることができ、早期を別途に区分しないのであれば、これを前期前半として設定できる。前期前半と後半の区分は、土器の文様と住居跡の形態によってなされる。前期の土器は全般的に有文で、特定の文様と住居跡の形態が組み合う傾向がある。後期は土器は無文、住居跡は松菊里型住居跡と非松菊里型住居跡に二分される。時期による具体的な年代については研究者ごとに差があるが、特に前期と後期の境界となる年代は紀元前800年、あるいは900年とそれぞれ異なる。これは最近の日本における弥生時代のAMS年代の上方修正と関連する部分が多い。

前期前半 (B.C.1,200 ~ B.C.1,000)

早期を認定する研究者は、土器では突帯刻目文土器に、方形ないし長方形の住居跡の内部に石敷石囲炉跡のある形態をその要素としてあげる。最近では突帯刻目文土器に二重口縁土器が共伴する例が増加し、一方で早期論が強化されつつ、もう一方では解体するという両極化が起こっている。後者の立場では、以前に前期に編年されていた二重口縁土器に石囲炉跡をもつ長方形と細長方形の住居跡を含む要素をもつ遺跡は、前期前半にまとめられる。

石器は石鏃と石庖丁が出土し、石剣は確認されない段階である。突帯刻目文土器と新石器時代の二重口縁土器を始めとする櫛文土器が伴って出土する場合もあり、新石器時代との関連性も提起されるが、石庖丁の出現によって、決定的に青銅器時代に位置づけられる。まだ具体的な墓制は確認されていない段階である。

前期後半 (B.C.1,000 ~ B.C.800)

土器の文様においては孔列文と口脣刻目文が中心で、二重口縁短斜線文が結合することもある。住居跡は長方形に石囲のない地床炉が中心である。この時期から石剣が出土し、土壙墓のような墓制も一部確認されるが、数的にはそれほど多くない。

後期 (B.C.800 ~ B.C.400)

後期は時間的に前期ほど長くはないが、やはり前後半を区分する基準が明確でない。ただし南部地方を中部の漢江から東海岸の蔚山までつなぐ斜線方向の南側は松菊里文化圏、それより北側は非松菊里文化圏としてくれば、文化的差異が存在する（図12）。松菊里文化は松菊里型住居跡をはじめとする多様な要素を含んでいるが、一部は非松菊里文化圏と共通する点もある。松菊里文化と非松菊里文化の最も大きな差は、炉跡のない松菊里型住居跡の存在有無である。非松菊里文化圏は炉跡のある方形系住居跡に特異な形態をもつ松菊里型住居跡と確然と区分される。さらに松菊里文化圏は現代においても水田農耕が中心である三南（忠清道、全羅道、慶尚道）地域に集中しており、松菊里文化は農耕文化とも言われるが、実際に水田や畠といった耕作遺構が多数確認される。

2) 時期別集落様相

前期

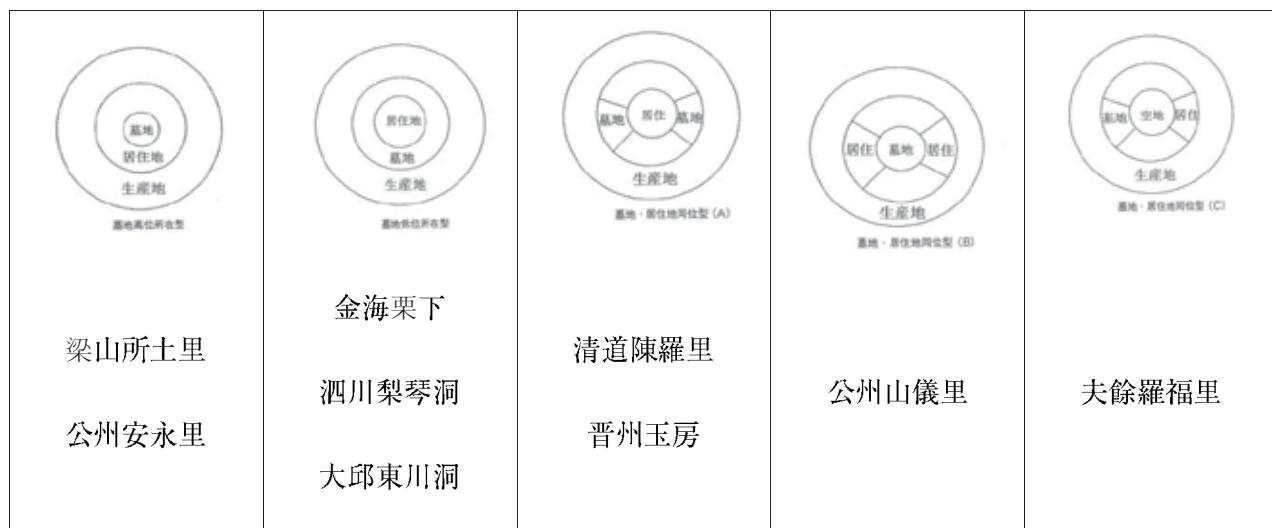
前期前半と後半の集落様相は大きく区別されない。突帯刻目文と石敷石囲炉跡を共有する集落の場合、その立地がほぼ河川辺の沖積地という特徴（図10）がある。これに対し二重口縁土器と石囲炉跡をもつ細長方形住居跡や地床炉跡をもつ細長方形・長方形住居跡は地域的な差異があり、沖積地に立地することもあり、丘陵に立地することもある（図11）。前者は江原道、慶尚道地域である反面、後者は忠清道、全羅道地域が中心である。

前期の集落構造は新石器時代と類似し、特別な点はない。もちろん住居跡の数は圧倒的に増え、天安白石洞の場合200軒を超す住居跡が確認されたが、他の性格の遺構は全く確認されていない。墓制が明確でなく、

清原大栗里のような環濠集落はまれである。平地遺跡において高床家屋も一部確認されてはいるが、その例は多くない。墓制として土壙墓が一部で確認されるが、群集する様相はあまり見られない。なお、支石墓がこの時期から始まったという見解（裴眞晟 2011）がある。

後期

実のところ青銅器時代の集落構造が良く現れている時期は後期である。特にこの時期の代表的な文化である松菊里文化の要素をもつ集落の場合、多様な構造を見せる。まず、集落構成要素の中に支石墓に代表される墓制が登場し、墓域は住居域周辺の特定地域に分布するようになる。また、貯蔵施設と推定される高床建物跡と貯蔵穴がやはり登場する。慶尚道地域では松菊里型集落が大部分沖積地に立地しているが、貯蔵施設として土坑式よりも高床建物が圧倒的である。これに対し忠清道や全羅道地域では松菊里型集落が丘陵地に立地しており、土坑式の貯蔵穴が中心である。



模式図. 松菊里文化の集落類型 (崔鐘圭 2005を参考にした)

松菊里文化が農耕と密接な関連があるという事実は、確認された水田と畠を通じて知られる。特に松菊里型集落が沖積地に立地する慶尚道において、農耕遺跡の事例が他地域に比べて多い。忠清道では論山麻田里遺跡で谷底平野に水田が確認されたように、丘陵周辺の谷底に農耕関連遺構が分布している可能性がある。

このように住居跡、墓、耕作地の領域が明確になる様相は、上の模式図にあるように地域ごと、遺跡ごとに少しづつ差がある。

また、後期集落の特徴としては環濠集落を挙げられる。環濠は一部前期段階にも見られるが、一般化するのは後期からである。松菊里文化の標識地である松菊里遺跡の場合には環濠よりは木柵をめぐらせたが、松菊里型集落と非松菊里文化圏でも環濠集落が確認される。

非松菊里文化圏は大きく漢江上流地域である江原道と蔚山を中心とする南東海岸圏を挙げられる。前者は「泉田里文化」、後者は「検丹里文化」圏域に設定されるが、松菊里文化圏に比べ集落構成要素の多様性はやや劣る。特に墓域がないことや貯蔵施設が不明であることなどが注意される。集落立地では江原道は河川辺の沖積地、蔚山圏域は丘陵地と明確である。ただし、住居跡の形態においては炉跡の有無を含めて全く異なるが、基本的に前期に比べ規模が縮小する傾向は、松菊里文化圏でも非松菊里文化圏でも同一である。

3. 先史時代の集落と農耕との関係

朝鮮半島の先史時代、特に新石器時代と青銅器時代の集落研究の対象は、当時の社会に対する性格を中心になされてきた。すなわち新石器時代は農耕遺跡よりは貝塚遺跡が多数であることに見られるように、狩猟と採集が中心になる社会であり、定住性の低い短期居住が一般的で、集落構造が単純なこともそのような脈絡で理解されてきた。これに対し青銅器時代は前期から、農耕社会は後期になってから認定されるが、多数の住居跡をもつ多数の集落が確認される。このため、定住性がある程度背後にある社会と見なされている。

前期の集落構造が新石器時代と大きく異ならず単純ではあるものの、定住集落であることを前提に、具体的には確認されていないが、焼畑と畠を中心とした農耕が行われたものと推定する（安在皓 2000; 李亨原 2007）。しかしこれに対する反論も多く、何より青銅器時代前期まで墳墓空間が明確でないという点は定住性が低いという反証である可能性もある。新石器時代の集落調査事例が増加し、住居跡数が増加はしたが、単純に住居跡の数のみで定住性を高く見ることはできないのも事実である。よって、青銅器時代後期の農耕と関連した具体的な遺構の確認や、多様な集落構成要素に意味を置くのである。

新石器時代前期に編年され、多数の住居跡が確認された襄陽鰲山里やソウル岩寺洞遺跡については、時期判断において研究者間の差があるという点と、中西部海岸地域の多数の住居跡が確認された集落については、列状配置の観点から大規模集落の存在可能性を提起しているが、年代測定結果や解釈の恣意性からみて難しい部分がある。特に住居遺跡がほぼ確認されていない反面、貝塚を主とする遺跡が中心の南海岸の場合、人骨 48 個体が確認された韓国で唯一の前期の大規模墓域といえる釜山加徳道長港遺跡も、基本的に定住性よりは周期的な反復訪問地であった可能性が高い。

このような情況からみて、新石器時代の集落の性格は、定住集落よりは循環的訪問集落の可能性が高い。もちろん一部では長期居住と短期居住に分けて見る視点（林尚澤 2010）もあるが、住居跡の形態で区分されるという点は説得力に劣る。

青銅器時代前期において墳墓が登場していることは充分に可能性があり、実際にその例もある。しかし別途の空間領域として設定されるには無理がある。後期になってようやく集落内の一定の地域を占める点は、前期の集落が焼畑中心の反復短期居住方式のために特定地域（土地）に対する愛着が低い点と対比される。すなわち、農耕に集中するならば定住生活が後ろ盾にならなければならないのと同時に、その土地に対する権利行使や共同体（労働力）の持続のための方策として墳墓築造と儀礼行為を指向したのであろう。こうした行為は中心集落を中心に行われるものと理解されるが、特に松菊里文化圏で明らかである。特定地域内に多様な集落要素をもつ大規模集落と、その周辺の特定遺構中心の集落間関係をつなげる集落間あるいは集団間の機能分化、さらに階層分化を想定する研究もある。これはすなわち、青銅器時代後期を社会複合度が高まった階層社会であると見なすことでもある。

おわりに

朝鮮半島の新石器時代は最初に住居施設が作られてから一定期間の定着生活が始まり、青銅器時代は青銅器のような金属器の最初の使用と石剣のような武器の登場によって以前とは全く異なる社会相を見せることになる。この背景には農耕に対する受容の態度と適応の過程による側面が強い。上に見てきた全く異なる展開を見せた二つの時代の集落様相は、このような主張の証拠となろう。

参考文献

- 具滋振, 2010, 『韓國 新石器時代의 집자리와 마을 研究』 崇實大學校大學院博士學位論文.
- 金元龍, 1986, 『韓國考古學概說』 第3版, 一志社.
- 裴成姵, 2007, 「新石器時代 聚落의 空間構造」, 『韓國新石器研究』 13.
- 裴貞晟, 2011, 「墳墓築造社會의 開始」, 『韓國考古學報』 80.
- 安在皓, 2000, 「韓國農耕社會의 成立」, 『韓國考古學報』 43.
- 李昊娥, 2005, 「植物遺體에 基礎한 新石器時代 農耕에 대한 觀點의 再檢討」, 『韓國新石器研究』 10.
- 李相均, 2010, 『韓半島의 新石器文化』 全州大學校出版部.
- 李亨源, 2010, 『青銅器時代 聚落構造와 社會組織』, 書經文化社.
- 林尚澤, 2010, 「新石器時代 聚落體系의 變遷과 地域의 比較」, 『東北亞文化研究』 24.
- 林尚澤, 2006, 「빗 살무늬土器文化 聚落構造 變動研究 - 中西部 以南地域을 中心으로 -」, 『湖南考古學報』 23.
- 崔鐘圭, 2006, 「所土里遺蹟에서 본 松菊里文化의 一斷面」『梁山 所土里 松菊里文化集落』, 慶南考古學研究所.
- 河仁秀, 2006, 『韓半島 南部地域 櫛文土器 研究』 民族文化.
- 韓國考古學會, 2007, 『韓國考古學講義』



圖 2. 仁川 云西洞 I 遺蹟 2地點 住居址 配置圖

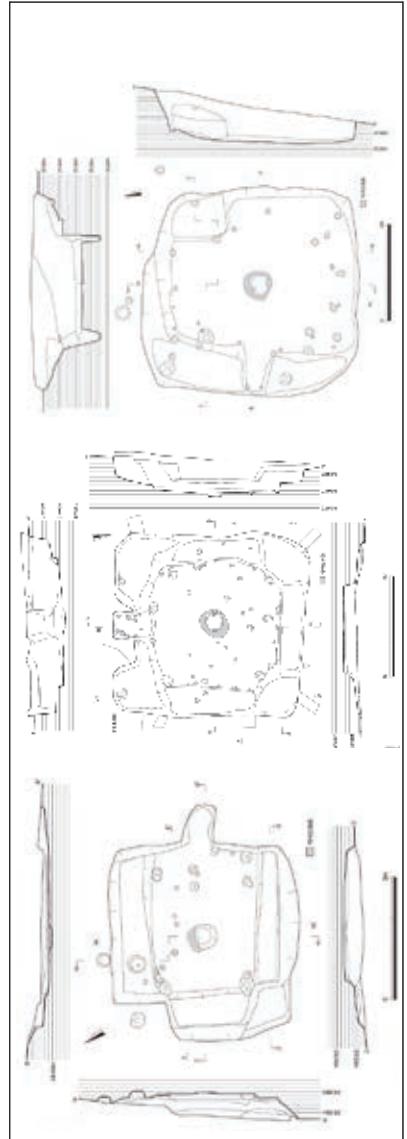


圖 3. 仁川 云西洞 I 遺蹟 2地點 2、3、14號 住居址

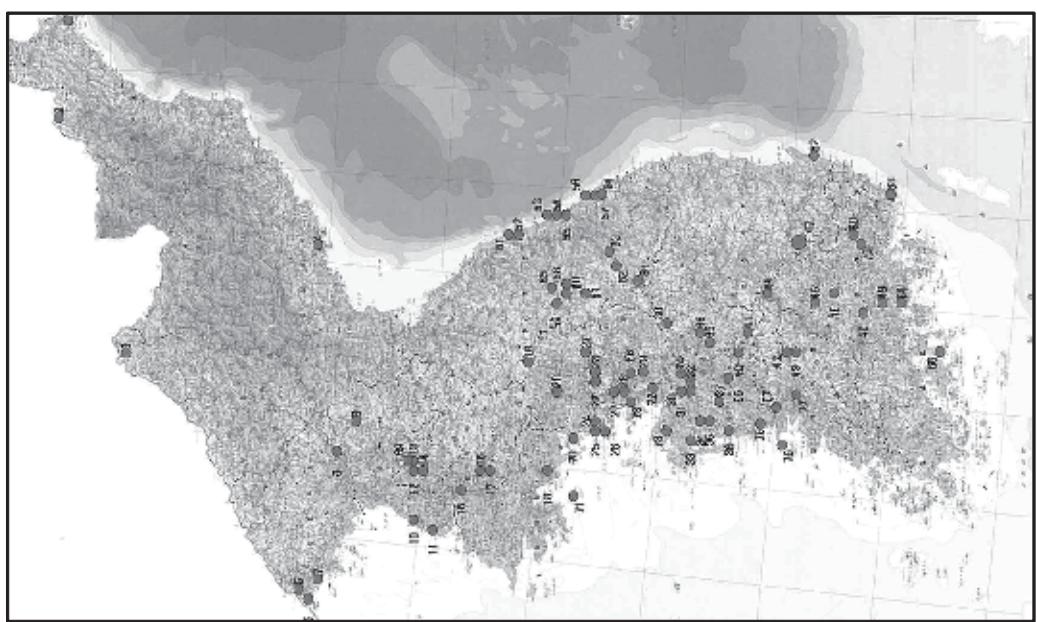


圖 1. 新石器時代 聚落遺蹟 分布圖

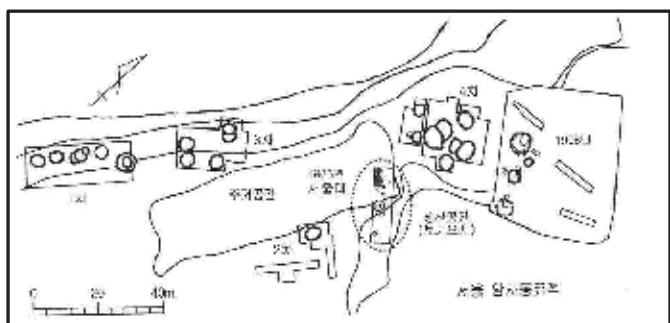


圖 4. 서울 岩砂洞遺蹟 住居址(太線) 配置圖



圖 5. 始興 陵谷洞 住居址(黑色) 配置圖

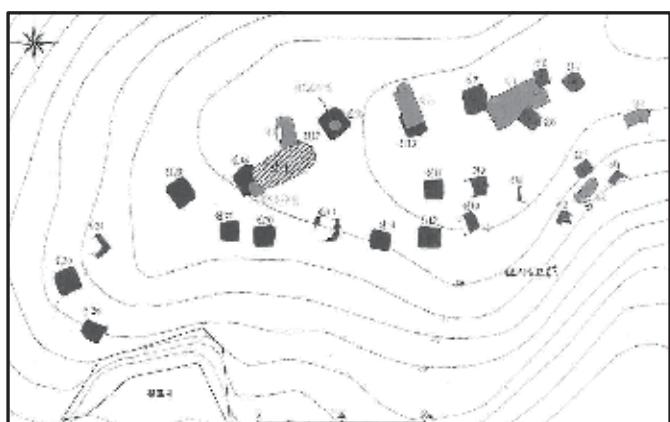


圖 6. 서울 岩砂洞 住居址

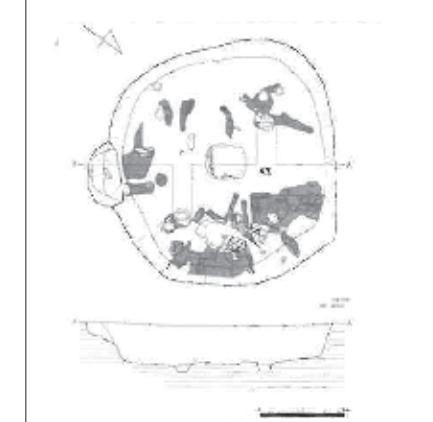


圖 7. 金泉 松竹里 配置圖、住居址



圖 8. 高城 鐵桶里 配置圖

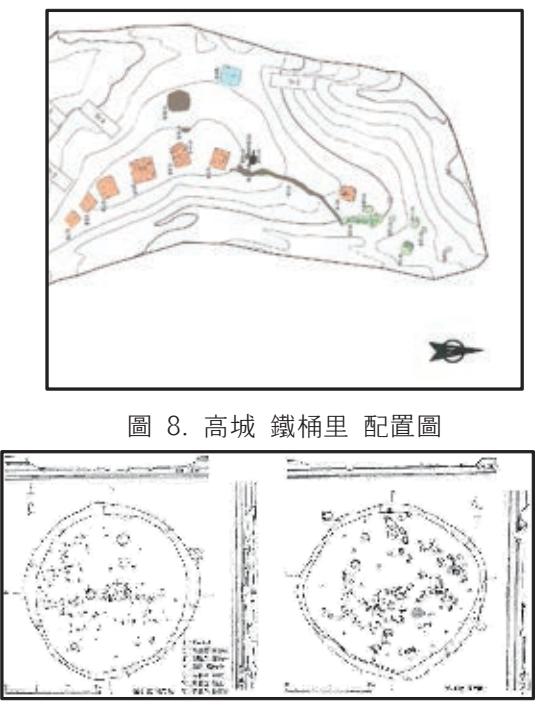


圖 9. 陝川 凤溪里 住居址

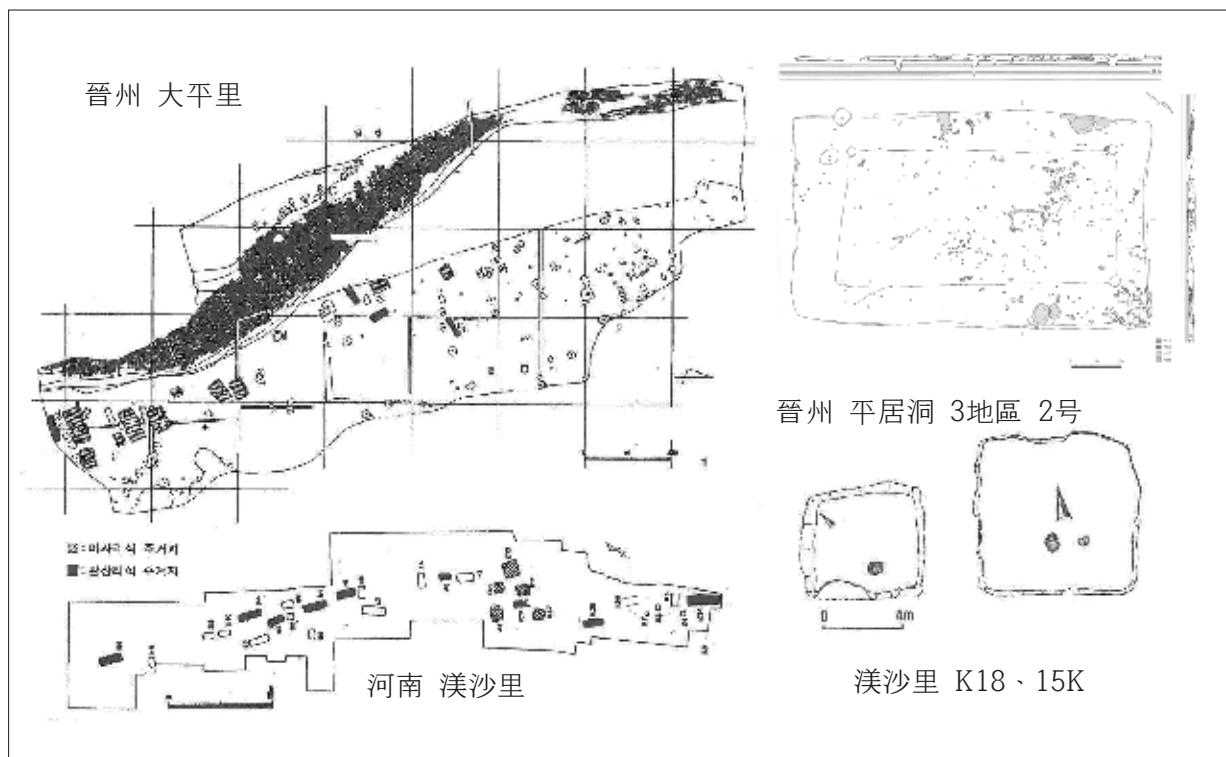


圖 10. 青銅器時代 前期 前半 聚落과 住居址

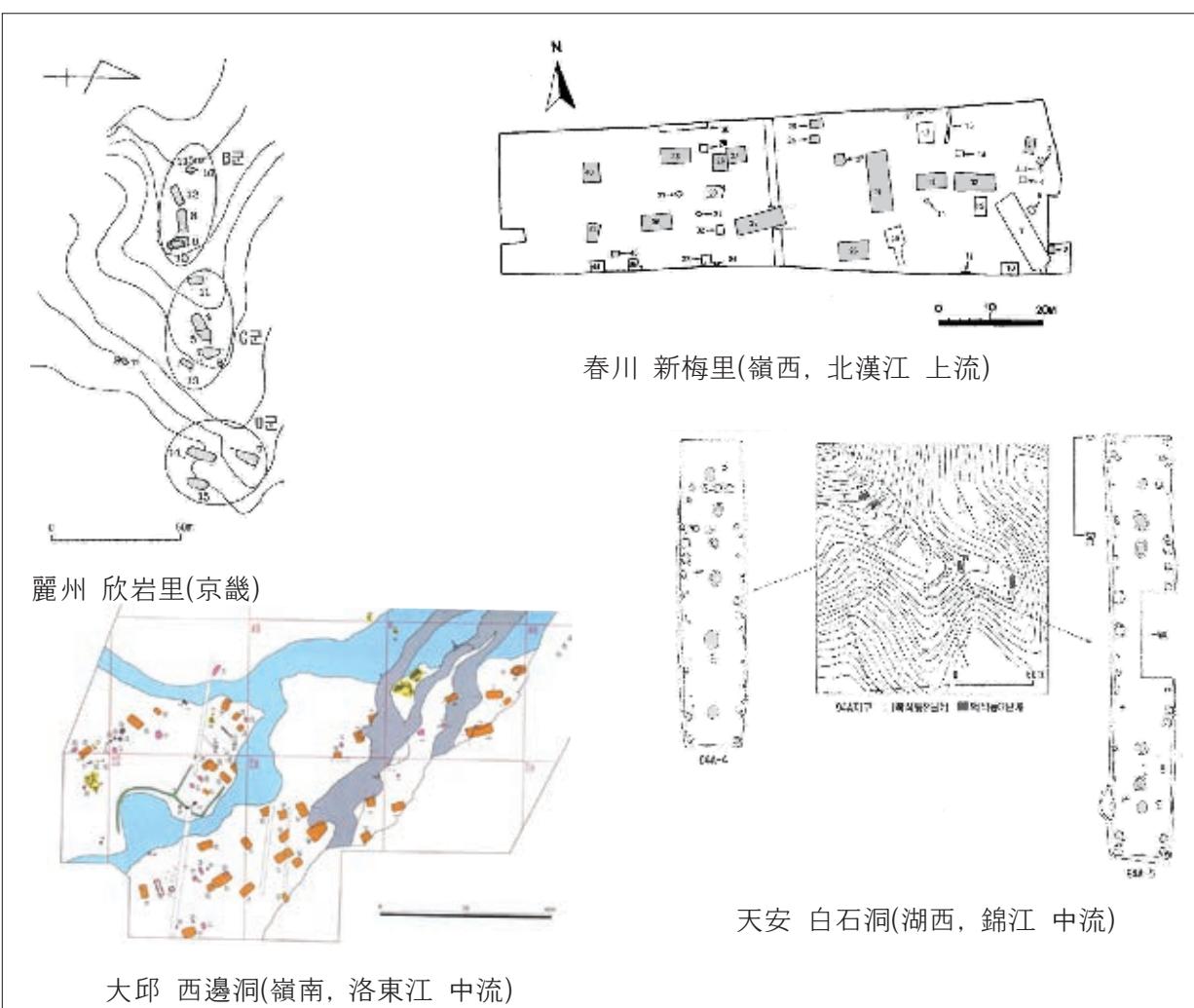


圖 11. 南部 各地의 前期 後半 聚落遺蹟

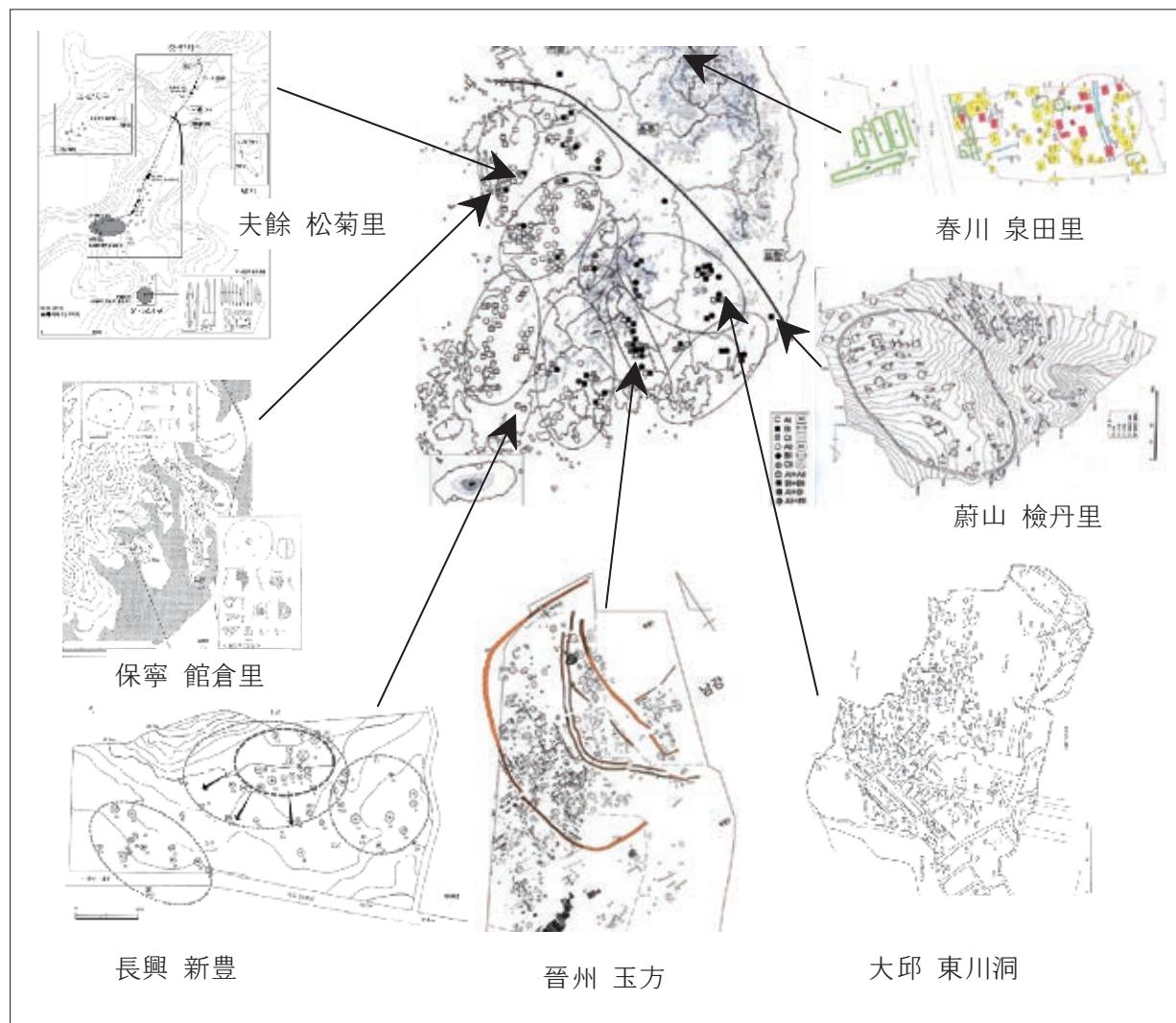


圖 12. 青銅器時代 後期의 松菊里文化/非松菊里文化 主要 遺蹟

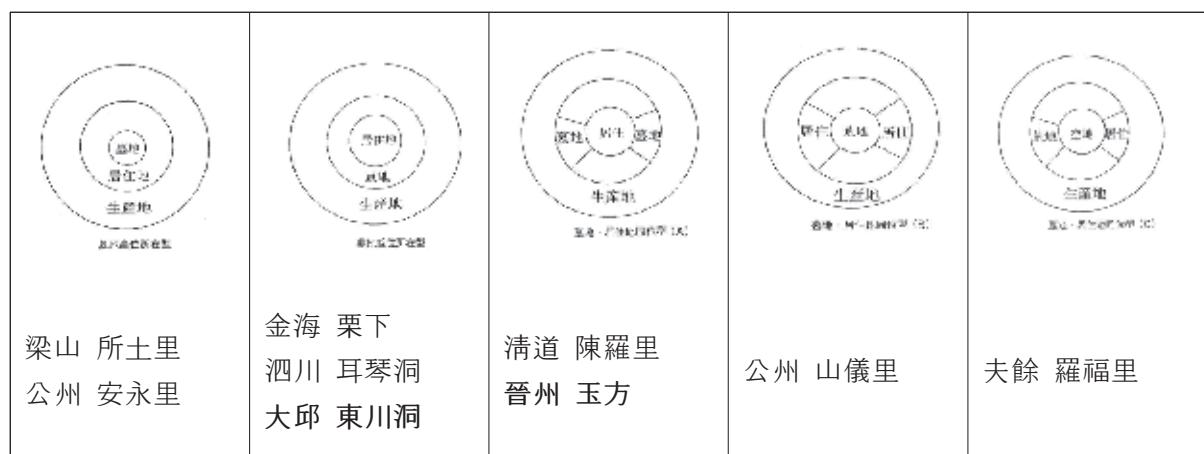


圖 13. 松菊里文化 聚落類型(崔鐘圭 2005 參考)